

卷頭言

月刊『幼児の教育』特別号のモチーフ(1) — 折り返し地点から振り返る —

浜口順子

「女の子と犬」の表紙のままで

今月号の冊子をお手に取られて、様子がいつもと違うことにお気づきになつた読者の方もいらっしゃるかもしれません。「毎年、新年号の表紙は新しい図柄になるのに、犬に手をさしのべている女の子の絵は、昨年と同じじゃないかしら?」と。実は、今月号から三月号までを、本誌の歴史を振り返る「特別号」としてお送りすることにいたしました。

『幼児の教育』は今年で第一一〇巻になります。一九〇一(明治三四)年、『婦人と子ども』という誌名で第一巻第一号を発刊してから一一〇年。昨年は倉橋惣三先生の没後五十五年の年でしたから、ちょうどその二倍。駅伝リレーに例えれば、津守真先生が倉橋先生から編集長(編集主幹)のバトンを受け取ったところを折り返し地



点とすると、今またスタート地点に立つてのことになります。

『幼児の教育』は、戦後間もなくの一時期を除いて、年間十二回のペースで発行されてきました。明治～平成の時代の中で、本誌の保育界への影響力や社会的な意味付けは大きく変動せざるを得ませんでした。今、「団塊の世代」が定年を迎え、平成生まれがそろそろ親になり始める時代に、このA5版の雑誌はどこに向かっていくべきなのか、この辺で腰を据えてじっくり考え、次の新しい一歩をどう踏み出すか、一から問い合わせをしています。しばしたたずんで後先を見定めるために、三か月、昨年と同じ図柄の表紙で過ごす時間をいただこうと思います。

アーカイブズ特集で『幼児の教育』を振り返る

三回にわたる特別号では、三つの視点から、弊誌一一〇年を振り返ろうと思います。第一回目の今月は、その振り返りを象徴するかのように、「省察」がキーワードになっています。今月号をばらばらと繰っていただくと、全体の半分近くのページ数が、過去の『幼児の教育』からの記事であることがおわかりでしょう。編集部として、初めは昔の表記どおり転載するつもりでした。でも今回紹介するアーカイブズは、戦前の記事が多いため、旧字の読みを判明するだけでもなかなか大変のようですが、読みやすい文字遣いに変更してあります。



読みやすいとはいっても、時代の違いからくる読みにくさはあります。しかし、その読みにくさこそ、逆に、現代の私たちの位置を浮き彫りにしてくれると感じます。後半の座談会記事では、幼稚園の先生方が当たり前に語るその言葉遣いに違和感を感じたり、子どものとらえどころの違い、はたまた笑うツボの違いまでも垣間見えたりして大変興味深いものです。でもやはり現代に通ずるものも感じたり、モノ言いいの率直な感じにはさわやかさを覚えたりもします。

一昨年から、「幼児の教育」のバックナンバーのネット公開が始まり、現在は、二〇〇七(平成十九)年十一月号までの全内容が検索して容易に読める状態になっています。まだご覧になつたことがない方は、ぜひ奥付(六四ページ)にあるURLまでアクセスしてください。気になる言葉の検索をしてみると意外な記事にぶつかります。読者お一人おひとりが編む「私のアーカイブズ特集」のようなものから、自分らしい保育研究を始めたり広げたりしてくださつたら嬉しく思います。

戦後の『幼児の教育』を支えてきた編集主幹たちの言葉

一一〇年間という本誌の歴史の後半部分は、津守真先生(一九五五年)から本田和子先生(一九八三年)、田代和美先生(一九九五年)、そして現在の浜口(二〇〇四年)へと編集主幹の任がリレーされてきています。本誌はそもそも、



日本幼稚園協会の前身「フレーベル会」の機関誌として発刊されたのですが、その「フレーベル会」とは東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）附属幼稚園の保姆（保育者）団体を母体とした研究団体でした。そのため、本誌の編集主幹は代々、お茶の水女子大学の保育領域周辺を担当する教員が受け継いでけています。不肖私がこの重責を田代先生から託されたばかりのころは、初代編集主幹中村五六先生と東基吉先生から引き継がれてきた一世紀以上の長い足跡をいつぱんに穢すことにはりはしないか、と肩の荷も気持ちも重かつたものです。でも、附属幼稚園の先生方や編集担当者、大学の同僚たち、そしてフレーベル館編集部に支えられつつ、しだいに『幼児の教育』を今後も作り続ける意味を追求していこうという意思が、お互いの中で一層強くなってきたようです。

「特別号」では、戦後のバトンをつないでくださった三人の方々に、元編集主幹として『幼児の教育』への思いを綴っていただきます。今月号はまず田代先生、二月号は本田先生、三月号は津守先生にご登場いただく予定です。

この折り返し地点を新たなスター・ティングポイントにして、若葉のころにはリニューアル版『幼児の教育』をお届けできるよう準備してまいりたいと存じます。

（お茶の水女子大学大学院准教授）